岡本一平論

――親の前で祈祷

岡本かの子

「あなたのお宅の御主人は、面白い画をお描きになりますね。嘸おうちのなかも、いつもおにぎやかで面白くいらっしゃいましょう。」

この様なことを私に向って云う人が時々あります。

そんな時私は、

「ええ、いいえ、そうでもありませんけど。」などと表面、あいまいな返事をして置きますが、心のなかでは、何だかその人が、大変見当違いなことを云って居る様な気がします。もちろん、私の家にも面白い時も賑やかな折も随分あるにはあります。

けれど、主人一平氏は家庭に於て、平常、大方無口

で、沈鬱（ちんうつ）な顔をして居ます。この沈鬱は氏が生来（せいらい）持つ現世に対する虚無思想からだ、と氏はいつも申します。以前、この氏の虚無思想は、氏の無頼（ぶらい）な遊蕩（ゆうとう）的生活となって表われ、それに伴って氏はかなり利己的でもありました。

それゆえに氏は、親同胞にも見放され、妻にも愛の叛逆を企（くわだ）てられ、随分、苦（にが）い辛（つら）い目のかぎりを見ました。

その頃の氏の愛読書は、三馬（さんば）や緑雨（りょくう）のものが主で、其（その）他独歩（どっぽ）とか漱石（そうせき）氏とかのものも読んで居た様です。

酒をのむにしても、一升（いっしょう）以上、煙草（たばこ）を喫（す）えば、一日

に刺戟の強い巻煙草の箱を三つ四つも明けるという風で、凡て、徹底的に嗜好物などにも耽れて行くという方でした。

食味なども、下町式の粋を好むと同時に、また無茶な悪食、間食家でもありました。

仕事は、昼よりも夜に捗るらしく、徹夜などは殆ど毎夜続いた位です。昼は大方眠るか外出して居るかでした。

しかしそうした放埓な、利己的な生活のなかにも、氏には愛すべき善良さがあり、尊敬すべき或る品位が認められました。

四五年以来、氏はすっかり、宗教の信仰者になってしまいました。

始めは、熱心なキリスト教信者でした。しかし、氏はトルストイなどの感化から、教会や牧師というものに、接近はしませんでした。氏は、一度信ずるや、自分の本業などは忘れて、只管(ひたすら)深く、その方へ這入(はい)って行きました。氏の愛読書は、聖書と、東西の聖者の著書や、宗教的文学書と変(かわ)りました。同時にあれほどの大酒(おおざけ)も、喫煙もすっかりやめて、氏の遊蕩(ゆうとう)無頼(ぶらい)な生活は、日夜祈禱(きとう)の生活と激変してしまいました。

その頃の氏の態度は、丁度(ちょうど)生(うま)れて始めて、自分の人

生の上に、一大宝玉でも見付け出した様な無上の歓喜に熱狂して居ました。キリストの名を親しい友か兄の様に呼び、なつかしんで居ました。或時長い間往来の杜絶えて居た両親の家に行き、突然跪いて、大真面目に両親の前で祈禱したりして、両親を却って驚かしたこともありました。また誰かに貰って来たローマ旧教の僧の首に掛け古された様な連珠に十字架上のクリストの像の小さなブロンズの懸ったのを肌へ着けたりして居ました。

氏の無邪気な利己主義が、痛ましい程愛他的傾向になり初めました。

やがて、氏は大乗仏教をも、味覚しました、茲にもまた、氏の歓喜的飛躍の著るしさを見ました。その後とて、決してキリスト教から遠かろうとはしませんけれど、氏の元来が、キリスト教より、仏教の道を辿るに適して居ないかと思われる程、近頃の氏の仏教修業が、いかにも氏に相応しく見受けられます。

氏は毎朝、六時に起きて、家族と共に朝飯前に、静座して聖書と仏典の研究を交る交るいたして居ります。

氏は、キリスト教も仏教も、極度の真理は同じだとの主張を持って居ります。随って二重に仕えるとい

う観念もないのであります。ただ、目下（もっか）は、キリスト教に対しては、その教理をやや研究的に、仏教には殆（ほとん）ど陶酔（とうすい）的状態に見うけられます。

　現在に対する虚無（きょむ）の思想は、今尚（いまなお）氏を去りません。然（しか）し、氏は信仰を得て「永遠の生命」に対する希望を持つ様（よう）になりました。氏の表面は一層沈潜（ちんせん）しましたが、底に光明（こうみょう）を宿して居（い）る為（ため）か、氏の顔には年と共に温和な、平静な相が拡（ひろ）がる様に見うけられます。暴食の癖（くせ）なども殆（ほとん）ど失（う）せたせいか、健康もずっと増し、二十貫目（かんめ）近い体に米琉（よねりゅう）の昼丹前（ひるたんぜん）を無造作（むぞうさ）に着て、日向（ひなた）の椽（えん）などに小さい眼をおとなしくしばたたいて居る所な

どの氏は丁度(ちょうど)象かなどの様に見えます。この容態(ようだい)で氏は、家庭に於(おい)て家人(かじん)の些末(さまつ)な感情などから超然(ちょうぜん)として、自分の室(へや)にたてこもり勝(が)ちであります。その室は、毎朝氏の掃除にはなりますが、書籍や、作りかけの仕事などが、雑然混然(ざつぜんこんぜん)として居て一寸(ちょっと)足の踏み所も無(な)い様です。一隅(はじ)には、座蒲団(ざぶとん)を何枚も折りかさねた側に香立てを据(す)えた座禅(ざぜん)場があります。壁間(かべ)には、鳥羽(とば)僧正(そうじょう)の漫画(まんが)を仕立てた長い和装(わそう)の額が五枚程(ほど)かけ連ねてあります。氏は近頃漫画として鳥羽僧正の画(え)をひどく愛好して居(い)る様(よう)です。

画などに対しても、氏は画面(えづら)そのものを愛すると同

時に、その画家の伝記を知るということを非常に急ぎます。近頃の氏の傾向としては、西洋の宗教画家や東洋の高僧の遺墨などを当然愛好します。それも明るい貴族的なラファエルよりも、素朴な単純なミレーを好み、理智的に円満なダビンチよりも、悲哀と破綻に終ったアンゼロを愛するという具合です。

近代の人ではアンリー・ルッソーの画を座右にして居ます。元来氏は、他に対して非常な寛容を持って居る方です。それは、時に他をいい気にならしめる傾向にさえなるのではないかとあやぶまれます。

たとえば、

「あなたが先日あの方にあげた品ですね、あれをあの方は、こんな粗末なものを貰ったって何にもなりゃしないって蔭口云ってましたよ。」などと告げる第三者があるとします。

この場合氏は、

「折角やったのに失礼な。」

などとは云わずに、

「そうかい。いや、今度はひとつ、あいつの気に入る様なのをやることにしようよ。」と云った調子です。

また、他人が氏を侮蔑した折など、傍から、

「あなたはあんなに侮蔑されても分らないのですか。」

など歯がゆがっても、
「分って居るさ、だけど向うがいくらこっちを侮蔑したって、こっちの風袋は減りも殖えもしやしないからな。」と、平気に見えます。

また、男女間の妬情に氏は殆ど白痴かと思われる位です。が氏とて決して其を全然感じないのではない相ですが、それに就いて懸命になる先に氏は対者に許容を持ち得るとのことです。一面から云えば氏はあまり女性に哀惜を感ぜず、男女間の痴情をひどく面倒がることに於て、まったく珍らしい程の性格だと云えましょう。それ故か、少青年期間に於ける氏は、かな

りな美貌（びぼう）の持主（もちぬし）であったにかかわらず、単に肉欲の対象以上あまり女性との深い恋愛関係などは持たなかった相です。熱烈な恋愛から成（な）った様に噂（うわさ）される氏の結婚の内容なども、実は、氏の妻が女性としてよりは、寧（むし）ろ「人」として氏のその時代の観賞（かんしょう）にかない、また彼女との或（ある）不思議な因縁（いんねん）あって偶然成ったに過ぎないと思われます。

「女の宜（よ）い処（ところ）を味わうには、それ以上の厭（いや）な処を多く嘗（な）めなければならない。」とは、女の価値をあまりみとめない氏の持説（じせつ）です。

氏は近来（きんらい）女の中でも殊（こと）に日本の芸者及（およ）びそうした趣

味の女を嫌う様（よう）です。

音楽なども長唄（ながうた）をのぞいては、むしろ日本のものより傑（すぐ）れた西洋音楽を好みます。

席亭（せきてい）へも以前は小（こ）さんなど好きでよく行きましたが、近頃は少しも参りません。芝居は仕事の関係上、月に二つ三つはかかしませんが、男優では、仁左衛門（にざえもん）と鴈次郎（がんじろう）が好きな様（よう）です。

氏は家庭にあって、私憤（しふん）を露骨（ろこつ）に洩（も）らしたり、私情の為（ため）に怒って家族に当（あた）ったりしません。その点から見て、氏は自分を支配することの出来る理性家であるのでしょうか。たまたま家族の者に諫言（かんげん）でも加えるには、

曾て夏目漱石氏の評された、氏の漫画の特色とする「苦々しくない皮肉」の味いを以って徐ろに迫ります。それがまたなまじな小言などよりどれほどか深く対者の弱点を突くのです。また氏の家庭が氏の親しい知己か友人の来訪に遇う時です、氏が氏の漫画一流の諷刺滑稽を続出風発させるのは。そんな折の氏の家庭こそ平常とは打って変って実に陽気で愉快です。その間などにあって、氏に一味の「如才なさ」が添います。これは、決して、虚飾や、阿諛からではなくて、如何なる場合にも他人に一縷の逃げ路を与えて寛ろがせるだけの余裕を、氏の善良性が氏から分泌させる自然の

滋味に外ならないのです。

　氏は、金銭にもどちらかと云えば淡白な方でしょう。少しまとまったお金の這入った折など一時に大金持になった様に喜びますけど、直きにまた、そんなものの存在も忘れ、時とすると、自分の新聞社から受ける月給の高さえ忘れて居るという風です。近頃、口腹が寡欲になった為、以前の様に濫費しません。

　氏は、取り済した花蝶などより、妙に鈍重な奇形な、昆虫などに興味を持ちます。たとえば、庭の隅から、ちょろちょろと走り出て人も居ないのに妙に、ひがんで、はにかんで、あわてて引き返す、トカゲとか、

重い不恰好な胴体を据えて、まじまじとして居る、ひきがえるとか。

人にしても、辞令に巧な智識階級の狡猾さはとりませんが、小供や、無智な者などに露骨なワイルドな強欲や姦計を見出す時、それこそ氏の、漫画的興味は活躍する様に見えます。氏の息のまれに見るいたずらっ子が、悪たれたり、あばれたりすればする程、氏は愛情の三昧に這入ります。

氏はなかなか画の依頼主に世話をやかせます。仕事の仕上げは、催促の頻繁な方ほど早く間に合わせる様です。催促の頻繁な方程、自分の画を強要される方

であり、自分に因縁深い方であると思い極めて、依頼の順序などはあまり頭に這入らぬらしいのです。
終りに氏の近来の逸話を伝えます。
氏の家へ半月程前の夕刻玄関稼ぎの盗人が入りました。ふと気が付いた家人は一勢に騒ぎ立てましたが、氏は逃げ行く盗人の後姿を見る位にし乍ら突立ったまま一歩も追おうとはしませんでした。家人が詰問しますと、
氏は「だって、あれだけの冒険をしてやっと這入ったんだぜ、（盗人は三重の扉を手際よく明けて入りました）あれ位いの仕事じゃ（盗人は作りたての外套に

帽子をとりました。）まだ手間に合うまいよ。逃がせ逃がせだ。」という調子です。氏のこの言葉は氏のその時の心理の一部を語るものでしょうが、一体は氏は怖くて賊が追えなかったのです。氏は都会っ子的な上皮の強がりは大分ありますがなかなか憶病でも気弱でもあります。氏が坐禅の公案が通らなくて師に強く言われて家へ帰って来た時の顔など、いまにも泣き出し相な小児の様に悄気返ったものです。以上不備乍ら課せられた紙数を漸く埋めました。

底本：「愛よ、愛」メタローグ
1999（平成11）年5月8日第1刷発行
底本の親本：「岡本かの子全集」冬樹社
1976（昭和51）年発行
※「椽（えん）」の表記について、底本は、原文を尊重したとしています。
入力：門田裕志
校正：土屋隆
2004年3月30日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。